3　外周濠の調査（第282-11・-12次）

第282-11次調査

調査面積は南北17m×東西３mの51㎡である。調査区は1993年度におこなった第242-1次調査区の約10m西にあたる。調査は市庭古墳外周濠への北側外提部からの落ちを確認することを目的とした。調査区の北端では地山面を現地表下約0.7mで確認し、北から約３分の１の地点から地山面が南へ緩く傾斜し始め、南端では約1.1mの深さとなる。これは外周濠への明確な落ちとはいえないが、外堤部が削平された外周濠の痕跡（SX217）であろう。なお、地山面の北半は黄白色粘土、南半は黄褐色バラスである。

この他に検出した主な遺構は、調査区北端にある土坑とそれを切る幅１m、深さ0.2mの東西溝SD215である。ただし、遺物が含まれていないため、いずれも時期は不明だが、奈良時代に遡る可能性もある。

第282-12次調査

本調査では、市庭古墳の内堤から外周濠への落ちを確認し、北接する第282-11次調査の成果と合わせて、外周濠の幅を推定することを目的とした。

検出した主な遺構は、幅40cm、深さ50cmの斜行溝SD220と斜行溝北端における落ち込みSX225である。溝内から遺物は出土していないが、堆積土の状況からみて、この溝は奈良時代のものと思われる。また、斜行溝北端における落ち込みSX225では、堆積土は下から①地山（黄褐色バラス）の落ち込み、②下層堆積土、③15～20cmの大きさの石列、④上層堆積土に混じる５～10cmの小礫を含む層、に分けられる。斜行溝SD220の堆積土は、②の下層堆積土と基本的に同じであり、③の石列が斜行溝の入口を止めるように置かれている。市庭古墳の外周濠は奈良時代に庭園への再利用が考えられるため、斜行溝、北端の石列および落ち込みは庭園に関係する遺構の可能性もある。また、発掘区中央付近より北に向かって地山が緩やかに傾斜しており、内堤から外周濠への落ちの痕跡と考えられる。第282-11次調査で推定された外周濠北端の傾斜変換線と本調査の外周濠南端と思われる傾斜変換線間の距離は約17mとなる。これは第126次調査（昭和55年度）で確認された外周濠の幅（肩部で18m、溝底で16m）に近い。　（舘野和己・高妻洋成）

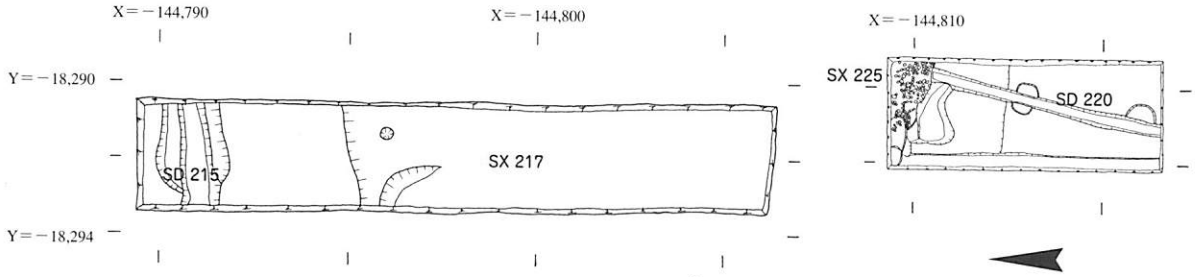

図83　第282-11次（左）・282-12次（右）調査　遺構平面図　1：200

平　城　専（こらむ）欄　③

◆伊東太作さん退官記念サッカー

奈文研サッカー部設立当初からのメンバーで、ゴールキーパーとして大活躍された伊東太作さんが本年３月末日をもって定年退官された。それに先立つ３月14日（土）、伊東さんの退官記念歓送サッカー大会を開催した。この日は吉備池廃寺の現地説明会と重なり、藤原サッカー部員が参加できなかったのは残念であった。しかし、それでも20人以上の関係者が試合に集結し、伊東さんの退官を祝った。相手は奈文研OBのU氏率いる某女子大学サッカー部コーチ陣チーム。要するに、下心の固まりのような男どもの集団？であり、われら硬派の平城サイトスの敵ではなく、試合は３対０で圧勝！伊東さんも10分ばかりゴールマウスにたち、みごと敵の攻撃を零封した。

なお、ここ数年、サイトスの得点源として奮闘してきたＪ通信の寺沢記者をはじめ、Ｋ通信の福嶋記者、Ｙ新聞の渡辺記者が、いずれも人事異動で転出。この日は、この３人のジャーナリストの歓送サッカー試合ともなった。試合後は、お好み焼き屋「萬福亭」で祝賀会。記念品として、伊東さんには寄書きしたフランスワールドカップ専用ボール、他の３名には恒例のミニ・ボールを贈呈した。　（A）